

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The loss desire of our the two noble kinsmen

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: エグリントン, みか, Eglinton, Mika メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1518

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



‘The loss of our desire!’ *The Two Noble Kinsmen* における欲望とその喪失

エグリントンみか

1. 前口上 新作芝居と処女

New plays and maidenheads are near akin:
 Much followed both, for both much money gi'en
 If they stand sound and well. And a good play,
 Whose modest scenes blush on his marriage day
 And shake to lose his honour, is like her
 That after holy tie and first night's stir
 Yet still is Modesty and still retains
 More of the maid, to sight, than husband's pains.
 We pray our play may be so, for I am sure
 It has a noble breeder and a pure,
 A learned, and a poet never went
 More famous, yet 'twixt Po and silver Trent.
 Chaucer, of all admired, the story gives;
 There, constant to eternity, it lives. (Prologue, 1-14)¹

20世紀後半に至って、John Fletcher (1579-1625) と William Shakespeare (1564-1616) の合作とようやく「認知」された悲喜劇『二人の貴公子』(*The Two Noble Kinsmen* 1613-14年頃初演、1642年初版)² は、「新作芝居と処女は似た者同士」、「この芝居も処女のごとしあれかし」³ と詠う扇情的な前口上に

1 英語引用文及びその和訳の行数は、John Fletcher and William Shakespeare, *The Two Noble Kinsmen*, Louis Potter ed. (Surrey: Nelson, 1997) に依る。

2 *The Two Noble Kinsmen* は、1634年に出版された四折本の表紙に ‘Presented at the Blackfriars by the Kings Maiesties servants, with great applause: Written by the memorable Worthies of their time; Mr John Fletcher, and Mr William Shakespeare. Gent.’ と記されているにも拘らず、3世紀以上にわたって、シェイクスピア作であることを否定され、作者が不確定なままであった。その理由や批評史、演出史などについては、Potter (1-129)、大井 (317-22)、河合 (200-211) を参照。

3 和訳に当たっては、大井邦雄訳「二人の貴公子」、『イギリス・ルネサンス演劇集』第二巻（早稲田大学出版部、2002年）と河合祥一郎訳『二人の貴公子』（白水社、2004年）を参照しながら、筆者が訳出した。

よって幕が開く。口上役は「大枚はたいても噛りつきたい」初日の舞台と初夜の乙女を重ね、この芝居の「生みの親（種本作者）」たる詩人 Geoffrey Chaucer (1343?-1400)を引きながら、演劇—結婚—生殖—金銭—作者の名声を結び合わせる。

しかしながら、この淫らなまでに祝祭的な雰囲気は長くは続かない。次の場面で婚姻の神ヒュメーンに引き入れられて登場する、白衣のアテネ公爵 Theseus とアマゾン女王 Hippolyta の婚礼祝賀の歌は、すぐさま不吉な節へと転調してしまう。続いて黒衣の Three Queens が現れ、テーバイ王 Creon の軍に殺され、戦場に打ち捨てられたままの夫の亡骸を弔いたいと Theseus に懇願する。主要材源である Chaucer の *The Canterbury Tales* に納められた ‘The Knight Tale’ (1387-88) では、Theseus と Hippolyta の結婚はすでに成就されたもの、Shakespeare の先行作 *A Midsummer Night’s Dream* (1594-96?初演) では、劇終盤の新床入りですぐに成就されるものとして描かれている。だが、この *The Two Noble Kinsmen* においては、二人の婚礼は中断され、花婿 Theseus は Creon を討伐するために戦場へ向かい、成し遂げられることはない。さらに Theseus の凱旋後も、めでたい婚礼は、Three Queens による厳粛な葬儀と、Creon の甥で「高貴なる血縁の二人」組である Palamon と Arcite が取り交わす決死の会話にすり替えられてしまう。

大団円で三組の結婚式が催される *A Midsummer Night’s Dream* とは異なり、*The Two Noble Kinsmen* においては、Theseus と Hippolyta のみならず、他の二組の男女もめでたく結ばれることに失敗している。Chaucer の ‘The Knight’s Tale’ では、Arcite の死後しばらくしてから、Theseus とアテネ貴族の承認によって Hippolyta の妹 Emilia と Palamon との結婚式が挙げられ、二人が幸せに暮らしたことが記されている。だが、*The Two Noble Kinsmen* においては、当事者二人の意向を汲んでいるとは読み取れない Theseus の一方的な命令によって、Arcite の葬儀後 ‘A day or two’ (5.4.124) で挙式される旨が宣言されただけで、メインプロットの劇世界が閉じられてしまう。その間にサブプロットとして、材源には登場しない固有名詞を欠いた Jailor’s Daughter が身分違いの Palamon に寄せる過剰な性欲望と狂気が挿入されている。Palamon を装う Wooer と新床へ急いだ後、二度と舞台上に姿を現すことがない狂ったままの娘の結婚も、幸福とも現実的ともおよそ呼び難い問題含みのものである。

喜劇においてしばし大団円という形で芝居のクライマックスを飾る婚礼は、悲喜劇 *The Two Noble Kinsmen* においては、重要なプロットでありながら決して遂行され、舞台上で視覚化されることはない。前口上で ‘holy tie and first night’s stir’ と詠われながら、巧妙かつ奇妙なまでに三組の異性愛カップルの

結婚が舞台化されることはないのだ。男女間の幸せな床入りは、近い未来に起こるものとして強く期待されながら、いつの間にか事が成されているか (Hippolyta と Theseus)、幻想においてのみ成されるか (Jailor’s Daughter と Wooer)、当事者の欲望が欠如している、もしくは消滅したにも拘わらず強制的に執行を宣言されるか (Emilia と Palamon) に終止する。

むしろ男女の結婚と床入りは、瀕死、葬儀、狂気などを描く悲劇的な場面に乗っ取られてしまうことによって空洞化され、実体なき中心=真空として提示されている。その結果、三組の男女は、いずれも異性愛結婚を疑問に付す形になっている。経済用語を用いて描写されることの多い異性愛関係以上に、理想化された永遠の ‘holy tie’ として繰り返し称揚されるのは、Theseus と Pirithous、Palamon と Arcite の男性同士、そして Emilia と Flavina の女性同士、ひいてはアマゾン、女神 Diana、女性全般といった同性共同体の間の絆であり、‘love’ である。

異性愛結婚がことごとく宙吊りにされる *The Two Noble Kinsmen* を読むと、「友愛を志向するひとつの愛の理念から、結婚を志向する愛の理念へ」(藤田、77) とする劇構造を、「ホモソーシャル/セクシャルな欲望から、異性愛結婚を志向することを受容/強制する理念とその実質的な破綻へ」へと修正する必要があるが出てくる。よって、本小論においては、父権制階級社会の再生産を目的とする強制的異性愛に抗う、同性愛欲望をメインプロットを中心に論じていくことにする。

2. 欲望の三角関係と男同士の絆

Emilia と Palamon と Arcite。類まれな美しいヒロインを巡る、二人のヒーローの争いという恋の三角関係を考えるとき、René Girard の〈欲望の三角関係〉と、それを発展させた Eve Sedgwick の〈ジェンダーの非対称性と性愛の三角形〉の理論は極めて有効である。なぜなら現実世界同様、Boccaccio—Chaucer—Fletcher—Shakespeare と続く男性作家の手による *The Two Noble Kinsmen* でも、「ヨーロッパのハイ・カルチャーというべき男性中心の小説の伝統」(セジウィック、32) に違わず、男性「ライヴァル同士の絆」と「ホモソーシャルな欲望」が劇世界を支配しているからである。

突然 Emilia に恋をする Palamon と Arcite は、模範的ライヴァルたる競争相手が、ある対象 (女=Emilia) を求めるから己も欲しくなるという、Girard が指摘する〈模倣の欲望〉の典型をなぞっている。俗世を象徴する女性から隔絶された獄中の ‘holy sanctuary’ (2.2.71) における男性間の擬似結婚めいた誓い (PALAMON: I do not think it is possible our friendship / Should ever leave us.

ARCITE: Till our death it cannot. / After death our sprits shall be led / To those love eternally. [2.2.113-17]) は、Emilia の登場によってもろくも破棄されてしまう。

しかしながら、愛の対象を選ぶ際に決定的となるのは対象である女性の質ではなく、男性ライヴァルがその対象をすでに選択しているかどうかである。＜性愛の三角関係＞では、男性と女性の絆以上に男性ライヴァル同士の絆こそが行為を選択し、決定することを考慮に入れば、この誓いが破綻した訳ではなく、遅延されただけであり、それによって逆に強化されることが次の引用から示される。

PALAMON: Might not a man well lose himself and love her?

ARCITE: I cannot tell what you have done; I have,
Beshrew mine eyes for't; now I feel my shackles.

PALAMON: You love her then?

ARCITE: Who would not?

PALAMON: And desire her?

ARCITE: Before my liberty.

PALAMON: I saw her first. (2.2.156-160)

この場面で注目したい点は、Palamon は Arcite という申し分のないライヴァルが Emilia を「欲望している」ことを確認してから、言葉を交わしたことさえない未知の対象の所有権を「最初に見た」という他愛のない理由、一瞬間の差異を盾に主張し出すことである。対して Arcite は、飽くまで Palamon と彼が一心同体であり (... am I not / Part of your blood, part of your soul? you have told me / That I was Palamon and you were Arcite. [2.2.187-189])、二人で女を共有、享受することを提案している。(I love her as a woman, to enjoy her: / So both may love. [165-66])。だが、Palamon が女を「一人で愛し」(To love alone? [194])、独占権を譲らないという「子供じみた」(You play the child extremely. [207])、「狂気の沙汰」(You are mad. [203])にあることを知ると、Arcite は彼をからかいながらも (... when I see her next, And pitch between her arms, to anger thee. [219-20])、ライヴァルであり一心同体であるはずの Palamon の欲望を自ら模倣し始めるのである。ライヴァルが欲する女を欲望する Palamon と、欲望の対象である女以上に男同士の絆を重視する Arcite の関係は、亀裂が生じたように見えてその実＜性愛の三角関係＞の構造を裏打ち、反復しているだけなのである。

＜模倣の欲望＞は、理想のライヴァルが己の目の前から消えたときから、偏執的なまでに強固なものとなる。言葉や態度から相手の欲することを確認するのみならず、嫉妬心と想像力を持って不在の相手の欲望を編み出し、増殖させ、模倣していくからである。結果として＜性愛の三角関係＞では、女性への欲望よりも、男性ライヴァルへの欲望とその模倣こそが男性主体の行為を決定していくことになる。国外追放の処分を受けた Arcite と牢獄に居残ることになった Palamon の距離と運命は初めて分かたれるのだが、この後恋焦がれる Emilia 以上に二人が口にし続けるのは、相手の美質とそれゆえの妄想と嫉妬に他ならない。未知の女への渴望よりも、裏も表も知り尽くしたライヴァルに対する欲望と裏返しの妄想と嫉妬、それゆえの模倣行為こそが二人の動静を決めていく。だからこそ二人の運命は、最終場面での Emilia を掛けての決闘と和解に至るまで、一層複雑に絡み合っていくのだ。

Jeanne Addison Roberts は、‘Male rivalry (the arena of Mars) is at last powerful as heterosexual lust (the arena of Venus) in this play.’ (139) と指摘しているが、男が抱く女へのヘテロセクシャルな欲望以上に、男性間のホモソーシャル／セクシャルな欲望、もしくはナルシスティックな鏡像関係の方が、競争の対象である女への欲望をより強く生み出し、彼らの運命を生成していくのである。この証左として、見分けが付き難い相似の従兄弟の美質を褒め称え合う二人の台詞が、自画自賛的な響きを伴って似通ってくることが挙げられよう⁴。対照的に、競争の商品として懸けられた Emilia は、宮廷恋愛風のレトリックを交えて崇められるというより、以下の引用のように「男みたいに自らむしゃぶりつく」品性を欠いた肉欲の権化として、あるいは「パラモンになだめられる嵐や岩」と物質化されることによって、むしろ貶められている。

PALAMON: If he be noble Arcite-thousand ways!
 Were I at liberty, I would do things
 Of such a virtuous greatness that this lady,
 This blushing virgin, should take manhood to her
 And seek to ravish me. (2.2.258-62)

ARCITE: Good gods, what happiness has Palamon!
 Twenty to one, he'll come to speak to her

4 Potter もこの点を指摘している (196, 199)。例えば、第2幕第3場13-17行目で Palamon の立場を羨む Arcite の台詞は、第2幕第2場250-8行目で Arcite の立場を羨む Palamon の台詞に、論理的にも言語的にも平行しており、アイロニカルな効果をもたらしている。

And, if she be as gentle as she's fair,
I know she's his; he has tongue will tame
Tempests and make the wild rocks wanton. (2.3.13-17)

3. 「クイアな」女同士の絆、あるいは狂気

女性を肴に己の鏡像であり、片割れである男性ライヴァルを称揚する二人のヒーローは、Sedgwick が指摘する通り、男性中心の物語構造においては伝統的、古典的といつてよいほどに頻繁に登場するストック・キャラクターである。よって *The Two Noble Kinsmen* の特色を挙げるとするなら、ヒロインへの愛以上に男同士の絆を優先するヒーローたちではなく、彼らのライヴァル闘争の「褒美」、「花冠」、「称号」、「王国」(‘the victor’s meed, the prize and garland’, ‘The title of a kingdom’ [5.3.16, 33]) として物質化、商品化されるヒロイン Emilia の女性同性愛的な欲望となろう。女性への愛と欲望を志向し、恥じずに表明する Emilia は、英国ルネッサンスの同時代作品において、突出したオリジナリティを備えているからだ。

Theseus 率いるアテネの男性権力に屈服した後、婚姻を通じて結託する運命を選んだ、アマゾン女王の姉 Hippolyta の ‘That you shall never, like the maid Flavina, / Love any that’s called man’ (1.3.84-5) という懸念に、‘I am sure I shall not’ (85) と即答する Emilia は、その「クイア」⁵ な欲望ゆえに、父権制の基盤を成している男性<ホモソーシャル連続体>を揺るがしかねないヒロインである。異性愛や男性間の同性愛よりも、女性間の同性愛を強く志向する Emilia は、先に挙げた Palamon と Arcite の擬似結婚の場を、‘Tis called narcissus.’ (2.2.119) と言い放ちながら、侍女たちと戯れてみせる⁶。

‘Men are mad things’ (2.2.125) と言い放つ Emilia の言行は、常に Three Queens—Flavina—Women—女神 Diana—女性全体へと繋がっている。‘Being a natural sister of our sex’ (1.1.125) という女同士の絆と連帯、父権社会ではほ

5 この「クイア」は、20世紀後半以降、一般的に理解されている異性愛中心の人間関係を同性愛の視点から捉え直すクイア理論と同時に、同性愛志向のみならず、家父長制の性経済と再生産に寄与するか、しない(=「クイア」)か、という視点から女性像を考える Jankowski 理論の両方に依拠している。

6 Traub は Emilia のセクシャリティとその政治性を Laurie Shannon の見解に基づきながら以下のように定義している。‘As a votaress of Diana and sister to the Amazon queen, Emilia espouses faith in female autonomy and amity not only as a personal reference, but also as a political challenge to Theseus’s tyranny, which would compel political and erotic submission.’ (173) 続けて Emilia のセクシャリティが、Flavina との関係に見るような少女期特有ともいえるノスタルジックな同性愛体験に限られず、成人した現在も進行中のものとして、この第2幕第2場における Woman との性的なやり取りを挙げている。同場面における Emilia と Woman とのレズビアン関係については、Abrams、Jankowski なども言及している。

ば成立不可能な女性<ホモソーシャル連続体>に依拠しているのだ。‘That the true love ‘tween maid and maid may be / More than in sex dividual.’ (1.3. 81-2) と、レズビアンであることを断言して憚らない Emilia は、少女時代に最愛の女友達 Flavina と死に別れ、母権制アマゾンを滅ぼされて父権制アテネへ連れて来られ、そこでの性規範に乗っ取って Theseus に度々牽制されながら異性愛恋愛を強制されつつも、姉とは異なり独自の性志向と信念を貫き通そうとする。(‘I am not / Against your faith, yet I continue mine.’ [96-7]) Theseus の命令により、Palamon と Arcite の決闘の褒美として、結婚という父権社会再生産のための商品となることを止む無く甘受しながら、純潔の神 Diana の枝から手折られる信託を受けるまで ‘I am bride-habited, / But maiden hearted’ (5.1.150-1) と語る Emilia は、表向き父権制下の性経済に回収されたかに見えるながら、その実かたくなに男を受け入れない処女としての精神的自律を保っている点において、体制転覆的なのである。

Emilia は、例によって男性権力よりも同性からの非難を気に懸けながら (‘I have no choice, and I have lied so lewdly / That women ought to beat me.’ [4. 2.35-6])、Palamon と Arcite のいずれか一人を選び取れずジレンマに陥る。陰陽、左右対称の存在として描かれ、交換可能に見える二人の求婚者の肖像画を比較する第4幕第2場の Emilia の台詞からは、Arcite の方に僅かながら利があることが読み取れる。その理由としては、Emilia が少なくとも Arcite の人柄に触れているのに加え——驚くべきことに、Palamon とは言葉を交わす機会さえない——、Theodora A. Jankowski がいみじくも指摘するように (151-2)、‘sweet’ の変化形を多用して描写される Arcite が、男性間同性愛における女役として表象されることの多い Jove の寵愛を受ける美少年 ‘wanton Ganymede’ (15) として言及されていることが挙げられる。同性愛というより自己愛に傾いた ‘Narcissus’ (32) に例えられる陰のある Palamon と違って、女性的かつ同性愛的要素を多分に喚起させる ‘a sweet face’ (7) を持つ Arcite は、死んだ恋人 Flavina を Emilia に思い起こさせる存在であるからだ。

Emilia の Arcite に対する異性愛というよりも、同性愛の応用と読んだ方が適切な欲望は、Arcite の勝利により一度は実現するかに見えて、天上での争いの結果、Saturn の力が及んだ落馬事故によって隠蔽されてしまう。純潔の神 Diana に仕える Emilia に見込まれながら、Mars という男同士の絆を繋ぐ軍神を奉じた決闘の勝者 Arcite が己の所業を詫びながら死に、代わりに愛の神 Venus を奉じた敗者 Palamon が処刑を免れて Emilia を得るというプロットからは、父権社会再生産の脅威となる同性愛欲望を封じ、異性愛結婚を打ち立てる図式が浮かび上がって来よう。

だが、この結婚が同性間の ‘holy tie’ の精神性からは懸け離れた売買（春）によって獲得されたものである。Emilia を「安く」「買うために」「失われてしまった最愛の人」の尊さが以下のような台詞で表明されるとき、強制的異性愛に包摂された Arcite と Palamon の間にあったホモソーシャル／セクシャルな欲望が再び吐露されると同時に、Emilia への欲望もろとも異性愛体制が疑問に付されることになる。

ARCITE: Emilia,
To buy you, I have lost what's dearest to me,
Save what is bought; and yet I purchase cheaply,
As I do rate your value. (5.3. 111-14)

PALAMON: Oh Cousin!
That we should things desire, which do cost us
The loss of our desire! That nought could buy
Dear love, but loss of dear love! (5.4.110-12)

類稀な「二人の貴公子」Arcite と Palamon は、互いに己の鏡像＝分身を欲望し、模倣し合う存在であり、二人一組でいてこそ完全であったのである。よって Emilia が ‘Were they metamorphosed / Both into one! -Oh, why? There were no woman / Worth so composed a man’ (5.3.84-6) と嘆くのは至極妥当である。大橋洋一が指摘するように、「どちらか一方が存在しなくなるとき、欲望は成就するのではなく消滅」(401) してしまうのだから。＜性愛の三角関係＞の一角を成し、その欲望を模倣し続けていたライヴァルが死んでしまうと、女性への欲望が成就されるのではなく、欲望の構造ごと消滅してしまうパラドックスは、上記の Palamon の台詞からも読み込める。Emilia の獲得以上に二人の求婚者の心を動かすのは、‘dearest’、‘dear love’ たる片割れの喪失なのだ。加えて、この二人の嘆きの後に決まって響き渡るのは、男たちの間で譲渡、交換される Emilia の声ではない。愛も欲望も掻き消えたのちに Emilia と Palamon の形骸的な結婚を説伏せて混乱を統制する家父長、あるいは神の代理たる Theseus が発する高らかな最終宣告である。

THESEUS: Never Fortune
Did play a subtler game: The conquered triumphs,
The victor has the loss: yet in the passage

The gods have been most equal:—Palamon,
Your kinsman hath confessed the right o’ th’ Lady
Did lie in you, for you first saw her, and
Even then proclaimed your fancy: He restored her
As your stol’n Jewel, and desired your spirit
To send him hence forgiven; The gods my justice
Take from my hand, and they themselves become
The executioners lead your lady off;
And call your lovers from the stage of death,
Whom I adopt my friends.
... Let’s go off,
And bear us like the time. (5.4.112-124, 136-37)

上記のメインプロットの結末に見るように、Pirithous との男同士の絆を保ちながらアマゾンの女王 Hippolyta を婚姻によって懐柔した Theseus 命じる強制結婚によって、父権制社会の再生産にとって脅威となる同性愛と女性の主体性が形式的に封じ込められる。他方、サブプロットでは、「一對の完全無比の人間」(‘a pair of absolute men.’ [2.1.27]) から計らずも一人を選び取ってしまった結果、父権制と階級制のみならず、正気と現実からも逸脱した Jailer’s Daughter の欲望が、父親の望む Wooer を Palamon として演出し、結婚させるという Doctor による治癒によって、表向き飼い慣らされようとする。Emilia と名もなき Daughter の運命は、それぞれ階級や性志向は大きく異なっているが、己の欲望に合わない相手と結婚させられ、父権制階級社会の再生産に形式的に組み込まれる結末においては、平行関係にあるのだ。

4. 後口上 同性愛の所産としての *The Two Noble Kinsmen*

死と葬儀、狂気に乗っ取られ、形骸化した儀礼としての結婚のイメージが醸し出す矛盾と不条理を観客に感じさせながら、悲喜劇の世界は Theseus の宣言によって閉じられる。だが続く納め口上にて、追い討ちをかけるように女装した少年俳優が、恐らくはブラック・フライアーズ周辺の法曹学院などからやってきた男性観客に的を絞って ‘I would now ask ye how ye like the play/ . . . No man smile?’ (Epilogue, 1, 4) と呼びかけたとき、父権制階級社会の法を司る男たちの笑いは、文字通り凍りついたのではなかろうか。

‘New plays and maidenheads are near akin’ という卑猥な前口上で始まり、‘Gentlemen, goodnight!’ (18) と「殿方」のみへの挨拶で結ばれるこの芝居に

は、男性中心的な劇場空間において結婚制度という異性愛中心的な性経済を再演、再生産しながら、その過程によって隠され、正され、失われてしまった欲望を炙り出すことによって、正統とされる性規範を脱自然化し、批判する両方の効果を備えている。この両極端な作用が混じりあった劇作法に、家父長権を振りかざすと同時に同性愛者でもあったジェームズ一世下（James I 在位1603-25）の宮廷文化や政治状況に近接していた Fletcher と、引退後、宮廷を取り巻く権力構造からすでに一步距離を置いていた Shakespeare の異なる性規範を読み込むこともできる。

男性作家二人による共同作品という、出自からして極めて男性同性愛的な所産、さらに言えば単性生殖の結果としての *The Two Noble Kinsmen* がこの後に辿る運命——長らく、誰が「生みの親」であるのか「認知」されなかった不遇——にも目を向けるとき、父権性から外れた欲望が認められることはなかった、劇世界と現実世界に生きる女たちの復讐を読み取ることも可能であろう。

参考文献

- Abrams, Richard, 'Gender Confusion and Sexual Politics in *The Two Noble Kinsmen*', *Theme in Drama* 7 (Cambridge UP, 1985).
- Chaucer, Geoffrey, *The Riverside Chaucer*, ed. F. N. Robinson, rev. L. D. Benson (Oxford UP, 1987).
- Fletcher, John and William Shakespeare, *The Two Noble Kinsmen*, ed., Lois Potter, The Arden Shakespeare (Surrey: Nelson, 1997).
- , 大井邦雄訳「二人の貴公子」、『イギリス・ルネサンス演劇集』第二巻、早稲田大学出版部、2002年。
- , 河合祥一郎訳『二人の貴公子』、白水社、2004年。
- 藤田実、『『縁続きの二人の貴族』試論』、御輿員三編『チョーサーとシェイクスピア』、南雲堂、1982年。
- Green, Susan, "A mad Woman? We are made, boys", *Shakespeare, Fletcher and The Two Noble Kinsmen*, ed. by Charles H. Frey (Missouri UP, 1989).
- ルネ・ジラルド、『欲望の現象学—ロマンティックの虚偽とロマネスクの真実』、古田幸男訳、法政大学出版局、1971年。
- Jankowski, Theodora, A., *Pure Resistance: Queer Virginity in Early Modern English Drama* (Pennsylvania UP, 2000).
- 大橋洋一、『『二人の血縁の貴公子』——双生児の政治学』、『シェイクスピア全作品集』、村上淑郎編、研究社、1992年。
- アドリエヌ・リッチ、「強制的異性愛とレズビアン存在」、『血、パン、詩。』、

大島かおり訳、晶文社、1989年。

Roberts, Jeanne Addison, ‘Crisis of Male Self-Definition’, *Shakespeare, Fletcher and The Two Noble Kinsmen*, ed. by Richard Mallette (Columbia VP, 1989) 133-44.

Sedgwick, Eve Kosofsky *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire* (Columbia UP, 1984).

---, 上原早苗、亀沢美由紀訳、『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』、名古屋大学出版会、2001年。

Traub, Valerie, *The Renaissance of Lesbianism in Early Modern England* (Cambridge UP, 2002).